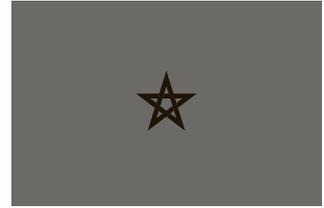


海外散歩



憧れのモロッコ

7つの世界遺産感動物語10日間 (その1)

前 理雄

1. はじめに

昨年はクルーズ船で上海に行ったものの、一泊してすぐに帰宅したため、本格的な海外旅行は2年ぶりでした。

当初、妻と娘が「モロッコに行きたい」と言い出したが、私はあまり興味を示さなかった。しかし、10日間も独りぼっちで留守宅にいるのもつまらないし、アフリカには旅行したことがないので、一度経験してもいいかな?と思うように気持が変化して、3人で旅行することになった。

主催は、クラブツーリズム株式会社で日程は、平成31年2月6日(水)～15(金)の10日間である。

行先は、モロッコ王国一国のみである。

※ Wikipedia

【モロッコ王国】：通称モロッコは、北アフリカ北西部のマグリブに位置する立憲君主制国家。東にアルジェリアと、南に西サハラ（サハラ・アラブ民主共和国）と、北にスペインの飛地（セウタとメリリャ）に接し、西は大西洋に、北は地中海に面している。首都はラバト。南に接する西サハラはスペインが放棄後、モロッコと現地住民による（亡命）政府であるサハラ・アラブ民主共和国が領有権を

主張している。モロッコは西サハラの約7割を実効支配しているが、国際的には認められていない。実効支配下を含めた面積は約599,500km²（うち、西サハラ部分が189,500km²）、人口は33,848,242人（2014年国勢調査^[4]）。

地中海世界とアラブ世界の一員であり、地中海連合とアラブ連盟とアラブ・マグリブ連合に加盟している。モロッコはサハラ・アラブ民主共和国を自国の一部であるとの立場から独立国家として承認しておらず、1984年にサハラ・アラブ民主共和国のアフリカ統一機構（2002年にアフリカ連合へ発展）加盟に反対して同機構を脱退、アフリカ大陸唯一のアフリカ連合（AU）非加盟国になっていたが、2017年1月31日に再加入した。

添説（添乗員（望月千花）さんの説明

「国土は、日本の12倍、人口は、3800万人(3,300万人?)」のようだ。

2. 旅程

2月6日(水) 22:00にアラブ首長国連邦のEMIRATES航空 319便（エコノミークラス426人乗り）のエアバスに搭乗した。途中アラブ首長国連邦のドバイ空港（乗り

継）まで約12時間。ドバイ（2時間半滞在）から目的地までの8時間50分の長旅である。

しかし、気流も安定し、比較的新しい飛行機のために音も気にならない程度に静かであったことと、出発が通常の睡眠時間と重なっていたために適当に眠ることができたこと。しかも、全座席に専用のTVがあったので、映画でもニュースでも飛行状況なども自在に見ることができた。ちなみに私は、日本の映画（英語字幕）のものを沢山見たので、英語の勉強をしながらか長時間の飛行にも飽きることはなかった。

途中、ドバイ空港で2時間30分のトランジットタイムの後、アフリカ大陸横断飛行についた。

約8時間50分の飛行後に目的地であるモロッコ王国で一番大きな都市のカサブランカ空港に着いた。合計時間は22時間半ほど経過しているが8時間の時差があるので、翌日（7日）の13時15分に無事到着した。

●2月7日(木)

・カサブランカ



カサブランカ空港周辺



ムハンマド5世廟



廟の衛兵



ハッサンの塔



シャウエンの旧市街の一角



エル・マンスール門



ムーレイドリッス廟



メディナ（旧市街）の全貌



テイトウアンの新市街



メディナで荷物を運搬するロバ

カサブランカ空港周辺は、東京と違って強い日差しが印象的であった。

市内を観光することなく、いきなりバスでモロッコの首都「ラバト」(1時間半 東に走行) に向かった。

沿線の風景をよく見ると、家畜の放牧場や一般の住宅が見える。住宅は、ほぼ、2階建ての鉄筋土壁の住宅で、土色のものや壁を白色に塗ったものだったが、大きな工場や商店、公共施設は、少ないようにも見えた。

沿道に生えている樹は、松に似た樹、ユウカリやゆずりはのように葉っぱの幅の狭い灌木が中心のように見えた。

・ラバト

15:30頃 首都ラバトに到着して市内観光した。

観光スポットは、現国王の祖父であるムハンマド5世のお墓とハッサンの塔だった。(世界遺産)

ムハンマド5世廟の真中に石棺が置かれていて、廟の入り口と廟の4隅に立つ 深紅の衣装をまとう衛兵はとても目を引く存在だ。

ハッサンの塔は、ムハンマド5世廟と同じ敷地にあるミナレット(モスクのシンボル塔)で、12世紀に建設途中で放棄されたものだ。

完成すれば 4~5万人が収容できるモスクの予定であった、現在は、360本の大理石の柱が残されている。

両遺跡を観光の後、5時間かけて青の街「シャウエン」にバスで移動した。

沿線は、きれいに整備された広大な牧草地や畑が広がり、それ自体は北海道の富良野をはるかに上回るスケールでニュージーランド南島の牧場風景にも似ていて爽快な気分だった。

結構、豊かな国かな?と感じさせた。

●2月8日(金)

・シャウエン

朝食後、メディナ(旧市街)の見学をした。街中にいろいろな青があって素敵な光景だ。

青い色は、かつてユダヤ人の住む家として、ペンキを塗らされていたが、その後、それが大変きれいなことが分かって、今では、みんなが自発的に青い塗料を塗っているという。

・テイトウアン

シャウエンを発って、北上して約1時間進んでスペイン風の白壁の街テイトウアン(世界遺産)に行った。

山の中腹には、新市街の住宅や役所・軍事施設等がある見事な景観である。

かつてスペイン領だったため、町の中心部には、スペインの領事館やキリスト教会なども残されていた。

当日は、金曜日(イスラム教では休日)だったため、閑静なメディナ(旧市街)を見学後は、南下してオリーブの樹の緑が美しいリフ山脈を5時間かけてドライブしてフェズに向かう。

途中でメクネス市内観光(世界遺産)

・フェズ

エル・マンスール門やムーレイ・イスマイル廟などを見学して、フェズに到着した。

迷路の街フェズ旧市街(世界遺産)や、14世紀の神学校「ブーイナニア」(世界一古い大学校)、ムーレイドリッス廟、ブージュルド門、カラウイン・モスク(などを見学したが、建物の構造や色彩が似通っているため次第に区別がつかなくなってきた。

この日からスーペリアクラスのホテルに2連泊した。

●2月9日(土)

午前中は、ヴォルピリスの世界



陶器のモザイクの一例



陳列された民族衣装



礫砂漠は続く



皮なめし工場



フェズ市街



陳列された皮製品

遺産(古代ローマ遺跡)を見学した。

モロッコは、かつて古代ローマ帝国によって支配されたが、3世紀には撤退した。

その当時の遺跡が世界遺産に登録されたものだ。

この後、旧市街を見学した。

古代ローマ帝国(紀元前後)にこれだけの勢力圏を持ったローマ帝国。遺跡の各所に近代的な文明と言える遺跡(浴槽や洗濯場、居間、石臼等)が残されているのも不思議だし、その古さにも驚く。

旧市街では、路地が狭いために背中に荷物を載せているロバやラクダがいた。

地域で穫れた果物や野菜を売っている店がたくさんあった。ちなみに、オレンジやミカン(日本産に比べると改良は進んでいないが、味はおいしかった)。

イチジクや杏などのドライフルーツも目に付いたが、モロッコ

パン(アラブパン)の売り場も目立った。

野菜の中には、「オバケカボチャ? :直径50cm以上)もあるかというカボチャの切り売り、(路上で客が要望する大きさに切って販売)する光景が見られた。

また、シシトウガラシやタマネギ、ジャガイモ等もオバケサイズのものがあり、遺伝学的には、二倍体・四倍体の野菜だと見受けられた。

さすがに温暖な土地柄だという印象を受けた。

次いで、陶芸品工場に行った。

いろいろなタイルを小さく割って1枚の板にモザイク状に張り付けたものは、硬くて丈夫できれいであった。

モスクや廟の壁や床は、全てこのモザイクでできている。

一般家庭でも、テーブルや壺などの家具調度品として古くから使われているが、その技は素晴らしいものであった。

次いで皮なめし職人の街タンネリを訪ねた。

沢山の水槽に染料(赤・茶・緑・黒など)を入れて漬けて乾燥させる工程を経て、革製品に加工される。

その規模は、世界一だそう、12世紀には職人が780人に上ったという。皮の種類は、ヤギ、ヒツジ、牛、ラクダ等である。店には、かばんや椅子、皮の家具調度品がものすごい数で陳列されていた。

特にヤギとラクダの皮で作ったパプーシュ(スリッパ)が有名である。

続いて、銅と錫の合金(青銅・ブロンズ)や銅と亜鉛の合金(真鍮)で作った茶器や装飾品を作って販売する店に立ち寄った。比較的若い夫婦の方は「真鍮の壁掛」を買って、ネームを刻んでもらっていた。

次いでサボテンの糸で作る民族衣装の店にも立ち寄った。

店内には、日本の機織り機に似た織機が陳列してあり、現代的な衣装が多数陳列されていた。

さらに民家によって「ミントテイ」をごちそうになった。アラビアンナイトに出てくるような大きな鶴首の茶器にミントを入れて、2~3回出し入れした後、高いところからミントテイを茶碗に注ぎ込む技術も見世物(ショー)としても楽しく、おいしくもあった。

各地の工芸品を沢山見て、モロッコ文化の一端をみた思いがする1日だった。

●2月10日(日)

フェズを発ってさらに南下してエルフードに向かった。

途中モロッコのスイスと言われる「イフラン」を観光後、アトラス山脈を見ながら中アトラス山脈のザード峠(標高2178m)を越えてエルフードまで9時間のバス移動だ。

沿道の景色は一変して、右も左も礫砂漠のようであったり、山肌はゴツゴツした岩山であったりほとんど緑は視界から消えた。

その光景は、アメリカのモニュメントバレーのように砂に飛び出した奇形の山があちこちにあり、山脈は地層がウネッていて、いかにも歴史を感じる光景である。地質学者、生物学者には興味があるだろう地形が何時間も続いた。

エルフードのホテルに到着した。(次号に続く)

(日動協ホームページ、LABIO21カラーの資料の欄を参照)